

橿原市制70周年 宮崎市姉妹都市60周年



本日、橿原市制70周年、そして宮崎市との姉妹都市盟約60周年という大切な節目を皆さまと共に祝えますことを、橿原市議会を代表して心よりお慶び申し上げます。また、ご来賓の皆さま、そして遠方よりお越しいただきました宮崎市の皆さま、長きにわたる友情に深く感謝申し上げます。

さて、私たちが立つこの地は、古くから万葉の人々が、自らの情熱や願いや恋心を「歌」に託した舞台です。言い換えれば、橿原市は日本で最も古くから「誰かを想い、言葉を伝えること」を大切にしてきた街であると言えます。

万葉集の第50番歌には、「藤原宮の役民の作れる歌」という一首があり、藤原宮の造営に従事した民衆の視点で、都が築かれる躍動感と、新しい宮殿への讃美が力強く詠まれています。特筆すべきは、これが帝や貴族ではなく、実際に重い石を運び、土を耕した「現場の人々」にスポットライトを当てた歌であるという点であり、歌の後半には、この地が永遠に栄えることへの願いが込められています。

この70年間、先人たちが積み重ねてきたまちづくりの歩みもまた、この歌と同様に、郷土への深い願いが形を成したものです。歴代7名の市長が「この街はどこへ向かうのか」という方向性を示し、32名の議長が「議会」という民主主義の根幹たる議論の場を整え、そして616名の議員が「市民の代弁者」、「行政の監視者」そして「政策の提案者」としての責務を全うしてまいりました。

その歩みの中心に常に存在したのは、市民の皆さまお一人おひとりの「もっとこうなればいいな」や、「未来の子ども達のために」という純粋な願いです。重い石を運び、都を築いた万葉の人々と、現代の困難な課題に立ち向かいながら、より良いまちづくりを目指す私たちの想いは、1300年の時を超えて響き合っています。

まちづくりとは、誰か一人の筆で完成させるものではなく、市民一人ひとりが一首ずつ、その時代の願いを書き足していく「歌集」のようなものです。多様な願いが幾重にも重なり合うからこそ、橿原市は唯一無二の輝きを放つ未来を描くことができます。宮崎市との60年にわたる絆も、この「歌」を共に詠み合ってきた歴史そのものです。互いの文化を尊重し、学び合ってきたこの友情を、私たちは次の70年、100年へと繋いでいかなければなりません。

結びになりますが、10年後、20年後の未来においても、橿原市が「誰かを大切に想い、あたたかい言葉を伝えられる街」であり続けるために、今日という日を新たに、皆さまと共に、次の一首を書き始められることを心から楽しみに思うとともに、本日ご臨席の皆さまの弥栄を、そして橿原市と宮崎市のさらなる発展を祈念いたしまして、私からの挨拶とさせていただきます。

本日は本当にありがとうございます。

令和8年2月15日

橿原市議会議長 うすい卓也

